

# アメリカ小説と批評の研究

巽 孝 之

2013年は、我が国におけるアメリカ文学研究が日本アメリカ文学会というかたちで制度化されてから50周年を迎えた年である。それと同時に、ジョン・F・ケネディ大統領暗殺後50周年にもあたっている。1963年11月22日、アメリカの夢の象徴のひとつである初の衛星放送として我が国の茶の間に届いた最初の画像がケネディ暗殺という悪夢であったショックを、いまなお記憶している世代は健在だろう。その瞬間において、以後のポストモダン・アメリカ文学の隆盛はなかったと断じて言い過ぎではあるまい。だがこの年はさらに、エイブラハム・リンカーン大統領が南北戦争のさなかで行ったゲティスバーグ演説から数えて150周年でもある。スティーブン・スピルバーグ映画『リンカーン』など関連作品が相次いだゆえんだ。

そんな2013年度のアメリカ小説と批評をめぐる研究を、まずは対象とする時代順に、単著からたぐってみよう。

まずは高梨良夫が英文で刊行した『エマソンと新儒教 環太平洋的研究』*Emerson and Neo-Confucianism: Crossing Paths over the Pacific* (New York: Palgrave Macmillan, 2014)は、19世紀中葉のアメリカ超絶主義思想家ラルフ・ウォルドー・エマソンと12世紀中国(南宋)の思想家・朱子、およびそれを受容した日本における新儒教との比較考察を通じて、時代も国家も異なる思想同士が環太平洋的視座に立つと思わぬ邂逅を遂げるいきさつを説得力豊かに論じた比較思想史。エマソンがキリスト教の限界を超越するべく東洋宗教に靈感を求めたことは広く知られているが、本書序文を寄稿しているアメリカン・ルネッサンス研究の泰斗たるハーヴァード大学教授ロレンス・ビュエルもいうように、フレデリック・カーペンターが1930年に『エマソンとアジア』を出してからというものエマソンと禅を比較考察する論考が増大した一方、高梨の著書はそうした先行研究の傾向に敢然と異議申し立てを行った点で21世紀のエマソン研究の道を切り拓いたと言ってよい。

山口ヨシ子『ダイヤモンドヴェルのアメリカ——大衆小説の文化史』(彩流社、2013年10月31日)は、1990年代以降わが国にも定着した新歴史主義批評から文化研究へおよび視点よりアメリカ文学史そのものを読み直す野心的にして精緻な試みとして評価しなくてはならない。19世紀半ばに印刷技術の向上が雑誌文学の隆盛を促進したことについてはすでに多くの研究があるが、本書は1860年、すなわち南北戦争勃発一年前の時点で一冊一セント(ダイヤモンド)の小型廉価物語本が刊行されて以来、文学と資本主義経済が密接に連動するようになったことをひとつの「文学的革命」と捉え、まさに

## アメリカ小説と批評の研究

そこから恋愛小説や探偵小説、空想科学小説に至る無数の文学サブジャンルが栄えたことを傍証していく。これまで在野の蒐集家の研究が支配的だった大衆文化研究の領域が、我が国でも学術分野として確立しつつあることの、これは証左であろう。

同書に続く時代を扱うものとしては、拙著ではあるが異孝之『モダニズムの惑星——英米文学思想史の修辞学』（岩波書店、2013年10月16日）が出ている。手前味噌になるので簡潔にとどめるが、本書は文字どおりハードコア・モダニズム作家ロレンスやエリオット、フォークナー、フィッツジェラルドやヘミングウェイとともにその周辺に位置するトウエインやワイルド、ボーム、ドイルらを扱うものの、その方法論はポスト・コロニアリズム批評家ガヤトリ・スピヴァクやワイ・チャー・ディモク、グレッチェン・マーフィーらが体现する惑星思考を批判的に発展させる実験である。

鈴江暉子『表層と内在——スタインベックの『エデンの東』をポストモダンに開く』（南雲堂、2013年12月12日）は作家の1962年におけるノーベル文学賞受賞から半世紀を記念して、それ自体が刊行60周年を迎える代表作『エデンの東』を中心に記念シンポジウムを企画実行した著者が、この古典を徹底的に再検証するとともに、基本的にはフェミニズム的視点より従来のスタインベック批評へ敢然と論争を挑む試み。論争の標的には評者自身も定められているのでいささか気がひけるが、にもかかわらず、かつてルイス・オーウェンズが1990年に『エデンの東』をメタフィクションとして読み解く斬新な論考を発表して以来、スタインベックを真っ正面から「ポストモダンに開く」研究は少なかったので、我が国におけるアメリカ文学研究の重鎮が最新の理論と伝記的資料を導入しつつ、最終的に世界文学におけるスタインベックの位置を再確認しようとする試みはいま最も必要なアプローチと思う。

山下昇『ハイブリッド・フィクション——人種と性のアメリカ文学』（開文社出版、2013年10月1日）は長くフォークナーを中心に研究してきた著者が、オビにもあるように新歴史主義批評の視点からアメリカ文学の名作を読み解いた一冊。世界初の民主主義の実験場として出発したアメリカ合衆国だが、じっさいのところトマス・ジェファソン起草になる「独立宣言」においても、白人男性の自由と平等と権利しか認めておらず、その他についてはテキストの余白へ封じ込めていたことは、広く知られている。しかしジェファソン本人が混血黒人女性奴隷とのあいだに子を成し、現代にまでその家系が連綿と続いている事実は、アメリカ文学の深層でも人種混濁を基本とし性差別を震撼させる性力学が起動せざるをえなかったハイブリディティの歴史の根拠となるだろう。かくしてサブタイトルのとおり、著者はホーソーン、トウエイン、フォークナー、エリソンといった男性文学の正典からフォーセット、ラーセン、ハーストン、ペトリ、ウォーカー、モリスンといった黒人女性文学の名作を丹念に精読する。その方法論は決して奇をてらわぬ正統的なもので、この領域に関心を抱く向きには絶好の教科書になるだろう。

## 回顧と展望

さてこの年度には、本来ならばこのカテゴリーの総括に収めるべきか否か迷う外観を備えた本も出た。いずれも、狭義のアメリカ文学研究の枠組みを大きく逸脱した——良く言えば超えてしまった——スケールを提示しているからである。しかし、いずれもアメリカ小説研究を出発点にした力作であり、来るべきアメリカ研究への示唆に満ちている点には変わらないので、あえて紹介したい。

ひとつは、西山智則『恐怖の君臨——疫病・テロ・畸形のアメリカ映画』（森話社、2013年12月20日）。若手による初の単著だが、これまで著者が19世紀アメリカ文学とりわけエドガー・アラン・ポーを徹底的に研究した背景とそこで培った精読の技法を文化研究にも巧みに応用し、活字から映像、パフォーマンス芸術におよぶ多彩な素材の分析から21世紀世界の本質を喝破して行く、まことにスリリングな批評。のっけから9.11同時多発テロをアメリカン・ゴシックとして捉え直し、ゾンビ映画やトラウマの政治学、サド・マゾのレトリックを語ったかと思うと、フェミニズムやSFにまで飛翔して行く本書の範囲はまさに今日可能な批評的想像力の可能性に挑戦したものだ。とりわけ、本書の洒落な表紙が暗示するように、ポーの探偵小説「モルグ街の殺人」からハリウッド映画『キング・ kong』『猿の惑星』へと広がる第四章は圧巻。

もうひとつは、すでに単著や共著、翻訳などおびただしい業績を残しながら、2013年に惜しまれつつ世を去った中堅・三浦玲一の遺著『村上春樹とポストモダン・ジャパン——グローバル化の文化と文学』（彩流社、2014年3月25日）。その根本は、オビに謳われているとおり「村上春樹はグローバル・ポピュラー・カルチャーとしての『アメリカ文学』を日本語で書いた作家である」という、あまりにもストレートにしてショッキングにすら響く主張に尽きる。なるほど、現在アメリカ合衆国自体のアメリカ文学教育において必須の教科書とされるノートン版アメリカ文学アンソロジーは多文化主義以降の風潮を受け、英語で書く作家であればアジア系でもアフリカ系でもネイティブ・アメリカン系でも積極的に受け入れているが、そこにはあくまで作家本人が英語で書いているかどうか、というハードルがある。そして、いくら村上春樹が全地球的な喝采を浴びていても、本人が英語で書かない限りは、こうしたアンソロジーには収録されない。しかし三浦の問いかけは、村上が多くの現代アメリカ作家を手がける翻訳家であること、多くの国で村上を手がける翻訳家たちに恵まれて来たことをどう考慮するのか、という鋭角的なものだ。その視点より、著者はカズオ・イシグロや宮崎駿、大友克洋にまで、グローバリズムの逆説を適用し、最終章では村上最新作『色彩をもたない多崎つくと、彼の巡礼の年』をフィッツジェラルドやフォークナー、ヘミングウェイらモダニズム正典の文脈に置き、リアリズムとモダニズムの関わりをめぐる既存概念を転覆するという野心的な批評実験を試みる。大学院生時代の三浦を知る評者は、以後彼の論考を読む機会が多く、そのいささかとっちらかった論文構成に戸惑いを覚えることも少なくなかったが、本書のヴィジョンはそこに一貫した論理

## アメリカ小説と批評の研究

的整合性があったこと、著者が驚くほど純粋に文学批評の未来を洞察していたことを確信させる。その早世が惜しまれてならない。合掌。

ちなみに、出版時期としては2014年度に属するが、レイモンド・ウィリアムズ研究会の機関誌『レイモンド・ウィリアムズ』第五号(連絡先: 日本女子大学・川端康雄研究室)の全面特集「特集・三浦玲一」が遠藤不比人の批評的追悼と銘打つ論考から折島正司をはじめとする追悼エッセイ群、故人の詳細な年譜と業績表まで掲載し、細部にわたり配慮が行き届いたもので、きわめて資料的価値が高い。

\*

共著に移る。

平石貴樹・後藤和彦・諏訪部浩一編『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス・大衆・文学史』(松柏社、2013年4月20日)は平石教授の東京大学定年退官記念論文集だが、まずその風変わりなタイトルが目を惹く。筆頭編者による序文によれば、アメリカ文学には作家たちがたえず過去の伝統を克服しつつ未来へ向けた新しさを求めて切磋琢磨する闘争の磁場すなわちアリーナがあり、それは作家たちのみならずアメリカ文学研究者たちをも巻き込むものとしてイメージされているという。新しい研究が必然的に先行研究との戦い転じては論争を要求する磁場から生まれるとすれば、これはむしろあまりにも真つ当な学問的姿勢だろう。その真つ当さを体現するかのごとく、全十二章がそれぞれ中心的に扱うテキストも、そのタイトルだけ取れば、ホーソーンの『緋文字』やオルコットの『若草物語』、メルヴィルの『クラレル』、ドライサーの『シスター・キャリー』、ヘミングウェイの『武器よさらば』などなどアメリカ文学史上の古典のオンパレードで、至極真つ当な選択に見える。しかし、それぞれの料理法については、たとえば後藤和彦がトウェインの『王子と乞食』と『ハックルベリー・フィンの冒険』の相互補完性を克明に分析した論考、上西哲雄がフィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』をはじめとする長編群にビジネスの視点からメスを入れた論考、そして前掲三浦玲一がティム・オブライエンの『かれらが運んだもの』を中心に冷戦リベラリズムにおいて形成されたアメリカン・ロマンスからネオリベラリズムによって構築されたポストモダン・ロマンスへの経緯を語る論考が、読みごたえがあった。

いっぽう、小林富久子監修/石原剛・稲木妙子・原恵理子・麻生享志・中垣恒太郎編の『憑依する過去——アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』(金星堂、2014年3月31日)は監修者の早稲田大学定年退職記念論文集であり21編を収める。このタイトルのゆえんは、3・11東日本大震災を機に監修者がアジア系アメリカ文学とトラウマの問題を思索するシンポジウムを企画したことに起因するとのことだが、それ以上に本論文集が、昨今の惑星思考以降の方法論が「カテゴリーの病」からの全快を説くいっぽう、ハイフン付アメリカ文学でしか語れない可能性を完全に粉碎してしまうことはできるのかという問い直しを試みているのは見逃せない。その意味

## 回顧と展望

で、以下の監修者序文は説得力にあふれる。「問題は、仮に『アジア系アメリカ文学』というカテゴリーを保持する必要性を説くとすれば、アジア系としての集団的・共同体的な文化的差異からくる豊かさは手放さず、同時に本来的には異種混濁的なものであるはずの当のカテゴリーをいかにして排他的・固定的なものに留めず、内外の多元的・流動的な価値や見方に開かれたものとして捉えうるか、そうすることでいかにして斬新な作品の読みを可能にし続けるかということであろう」(iii 頁)。そして本書で精読される日系作家ヒサエ・ヤマモトやジョイ・コガワ、フィリップ・ゴタンダ、カレン・テイ・ヤマシタにせよ、中国系作家マキシーン・ホン・キングストンにせよ、韓国系作家チャンネ・リーにせよ、いずれも戦争の記憶と無縁ではないことが注目される。アジア系アメリカ文学というカテゴリーの枠組みそのものを 3.11 以後の意識で組み直し、今日望み得る最も包括的な理論を提供した点において、本書が今後この分野の必読文献になるのは疑いない。

いわゆるフェストシュリフトではない共著としては、日本アメリカ文学会東北支部長を務めた村上東の編になる『冷戦とアメリカ——覇権国家の文化装置』（臨川書店、2014年3月31日）が、1990年代のいわゆるニュー・アメリカニズム批評からは抜け落ちていた環太平洋的な戦後日米関係に留意した構成で洞察力に富む、とりわけ 3.11 東日本大震災の衝撃を直接受けた地域で構想されただけに、そのモチベーションは確固たるものだ。編者序文を一瞥しよう。「広島・長崎の悲劇を体験した日本が、今度は自分の手で放射能の悲劇を繰り返したこと（今後健康被害が深刻化することが懸念される）は歴史の皮肉である。（中略）合州国の文化を、文化研究さえも、無批判に受け入れるのではなく、現在の人文科学研究を方向付けた冷戦期を現代が抱えるさまざまな問題を生み出した時代として捉え直し、そのうえで文化を考えよう（中略）。本書もそうした路線でまとめられている」（6頁）。具体的に本書が扱う話題は映画『ローマの休日』や『渚にて』からポストモダン作家ヴォネガットやピンチオン、批評誌『パーティザン・レビュー』、ポスト・コロニアリズム批評家エドワード・サイードに至るまで幅広く全 11 編の論考から成るが、とりわけ従来サザン・ゴシックやノンフィクション・ノヴェルの文脈で語られて来たカポータをめぐる斬新かつ充実した切り口の論考が三つも並んでいるところには、新世紀のアメリカ文学研究の可能性を大いに感じたものである。

特定作家に絞った共著としては高野泰志編『ヘミングウェイと老い』（松籟社、2013年11月15日）も好着眼の企画として高く評価したい。たしかにヘミングウェイといえば一般に堂々たる髭をたくわえた精悍にしてマッチョな老文豪のイメージで記憶されることが多く、じっさい彼が 1954 年にノーベル文学賞に輝くのも『老人と海』（1952年）の刊行がきっかけであった。しかし本書は、日本におけるヘミングウェイ学界の中では若手に属する編者の高野が、この作家はじっさいには同書を書いた時は 52 歳、

## アメリカ小説と批評の研究

猟銃自殺を図るのも61歳に過ぎなかったという厳然たる歴史的事実に注目し、ヘミングウェイをめぐる老人神話の再検討ないし脱構築を図ろうと編纂したものだ。はたしてその内容は作家の伝記を網羅する島村法夫の「ヘミングウェイの晩年を鳥瞰する——創作と阻害要因の狭間で」を冒頭に置き、若き作家がいかに老いを表現したかを考察する論考をいくつかはさんで上西哲雄の卓越した比較論考「フィッツジェラルドから見たヘミングウェイ文学の『老い』」を配置し、やがて必ずしも編者の見解に組みしない今村楯夫の「忍び寄る死と美の舞踏——『河を渡って木立の中へ』論」と編者自身が十八番とするセクシュアリティ理論から同作品を扱った論考「創造と陵辱——『河を渡って木立の中へ』における性的搾取の戦略」が並ぶ。全十編の力作に加え、巻末には文字通り白熱した討議「『老人と海』は名作か否か」が含まれるという、研究書としては他に類を見ない、破格にして手に汗握る構成となった。とくに下記のやりとりは、あらゆる作家研究の本質を抉るものとして重要である。

今村楯夫「高野さんが言ってるのは、我々が文学研究者としてこの本を読んだ時に、キャンノンに残らないし、論文もないから、これはやっぱり駄作なんだ、ということになると思うのですが、その論理はちょっとわからない」

高野泰志「駄作だと言いたいのではなくて、キャンノンとしてこれから先論じられていく作品の中に組み入れられるかどうかというのは、多様な批評を生み出していかれるかどうかということにあると言いたいんです。(中略)

『老人と海』に欠点があるのではないかということを少しでも言うのと、まるでそれは冒瀆だというぐらいのものすごい勢いで反発が返ってくる。それは一体なぜなのか。本当にこの『老人と海』はヘミングウェイ作品の中でも完全に特権化されたテキストだと思うんですよ。だから私はこういう議論をすることで、『老人と海』の特権性を剥奪したかった」(293 & 296-97頁)

\*

最後に、日本アメリカ文学会の新人賞も第4回を数え、2013年度には二年ぶりに受賞作が選ばれたので、その報告でしめくりたい。今回、同学会の機関誌には新人賞受賞作なしに終わった前回2012年を上回る全29篇の投稿があり、内訳は日本語論文9編、英語論文20編。うち掲載圏に入った論文より第4回新人賞の受賞候補としての有資格者(4月30日の時点で40歳未満の会員)を対象に厳密な審査を行い、最終候補三編を編集委員会内部に設けた8名から成る新人賞審査委員会で討議し投票にのぞんだところ、小林久美子氏がウィリアム・フォークナーの名作を扱った“‘Only the Flat Irons’: Counter-Monuments in *The Sound and the Fury*”が受賞作に選ばれた。

同論文は*The Sound and the Fury*を memorialization および counter-memorialization という意外な方向から再読しながら、作家自身が南北戦争以後の南部に育ったという

## 回顧と展望

過去と彼の芸術的達成との連動をみごとに説き明かすシャープな展開で読ませるもので、その着実な主題把握についても卓越した英文構築についても賞賛を浴びたが、とりわけアメリカ文学史上の正典における counter-monuments という魅力的な視点から分析しつつ、ブルックスを思わせる“the usable past,” “unusable past”なる大きなパースペクティヴが開かれる可能性を示唆して終わるところが評価された（より詳細な選評は『アメリカ文学研究』50号参照）。若く澁刺とした才能の登場を心から喜ぶたい。

（慶應義塾大学教授）